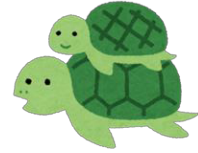


家庭・子ども支援事業について

～ あせらず ゆっくり みんなで ～



焼津市教育委員会 家庭・子ども支援課

1 家庭・子ども支援事業の状況

(1) 支援対象児童生徒数(人)

	R4年度 (4月当初)			R4年度 (9月末新規・再掲)			R4年度 支援実施 総数
	学 校 依 頼	保 護 者 依 頼	計	学 校 依 頼	保 護 者 依 頼	計	
はじめの一步 (児童生徒への対応)	30	10	38※	5	2	7	45
ささえて一步 (家庭問題への対応)	4	1	4※	0	0	0	4
いっしょに一步 (学校生活への対応)	2	1	3	0	0	0	3
計	32※	9※	40※	5	2	7	47※

※重複する場合があるため、計とは一致しない。

(2) 家庭訪問等の実績(回)

	R3年度 実施した支援(年間)		R4年度(9月末) 実施した支援	
学校や関連機関と行ったケース会議等の回数	1 2 3		6 4	
家庭訪問で直接支援した回数	3 8 6	6 2 0	1 6 0	2 8 3
公民館や学校等で直接支援した回数	2 3 4		1 2 3	
保護者と面談した回数	2 3 7		1 0 1	

(3) 改善等が図られた児童生徒の状況(人)

児童生徒の状況		R3年度 (年間)		R4年度 (9月末)	
登校できた	相談室等に通うことができた		6		11
	相談室等に定期的に通うことができた	24	6	31	9
	教室に通うことができた	※	14	※	8
	教室に定期的に通うことができた		1		7
適応指導教室やフリースクールとつながった	適応指導教室等に通うことができた	16	9		5
	適応指導教室等に定期的に通うことができた	※	7	17	12
生活の改善(安定)が見られた	精神的な安定や向上が見られた	28 ※	22	23 ※	19
	生活習慣が改善された		10		2
	親子関係等の家庭環境が改善された		10		10
新たに医療とつながったり、検査が行えたりした		10		2	
新たに関係機関とつながった		8		2	

※重複する場合があるため、計とは一致しない。

2 支援事例

事例1 はじめの一步(中3 男子 本人支援)

- ・中1の10月から、不登校になる。HSC(敏感で感受性が強い)の傾向や学習への苦手意識から不登校になったと思われる。
- ・まずは、昼夜逆転生活にならないようにすることや少しでも学習に取り組むことを目標に家庭訪問を中心に支援を行った。また、本人の好きなゲームの話や日常生活のことを話題にし、会話を多くすることで信頼関係を構築していった。
- ・次に、学校とのケース会議で「相談室登校」を目標にし、学級担任と連携しながら相談室登校を働きかけ続けた。中1の3学期から相談室登校ができるようになり、相談室担当の先生との信頼関係もできたことから、徐々に相談室登校の回数も増えていった。
- ・中3の7月からは毎日、相談室登校ができるようになり、教科によっては教室で授業にも参加できるようになっている。本人は中学卒業後の進路についても考えることができている。

事例2 はじめの一步(特別支援学級小4 男子 本人支援)

- ・人見知りが激しく、新しい環境になじみづらい特徴があり、新年度になり学級担任、学級が新しくなったことから不登校となる。
- ・定期的に家庭訪問を行っているが、昼夜逆転の生活で昼間に訪問しても寝ていて会えないことが多かったため、家庭訪問の時間帯を夕方に変更し、本人が起きている時間帯を見計らって訪問するようにした。
- ・初めは起きていても会うことを拒否されていたが、家の人の協力で、外で遊んでいるときに訪問させてもらい、一緒に遊ぶことができたことをきっかけに粘り強く家庭訪問を行い、徐々に信頼関係が構築され、本人との距離も縮まり、今では本人から「一緒に遊ぼう。」と声をかけてくれるまでになった。
- ・今後、更に信頼関係が強まったところで、次のステップに移行し、一緒に学校に登校し、学校で生活することを提案していく。

事例3 はじめの一步(小6 男子 本人・母親支援【再支援】)

- ・小4の12月から登校渋りが始まり、小5の5月に担任の先生が怖いので登校できないと母親から連絡をもらい、支援を開始する。
- ・担当者と相談室での学習から始め、適応指導教室や自然教室、ダンスの練習、授業などへ参加できたときには称揚することを繰り返した。小5の3月には「6年生になる練習として学校へ行く日を増やす」と目標を立て、週2日は登校することができるようになったことから、次年度のあゆみによる支援は休止することとし、母親や学校から要請があったら支援を再開することとした。
- ・小6の5月に母親から「徐々に学校には登校できているが、算数がわからないのであゆみの担当者に教えてもらいたいと本人が言っている。」と連絡が入り、学校と支援方法を協議し、本人と母親との面談から開始した。
- ・現在は、昼前からの登校ではあるが、毎日登校し、授業にも参加できている。友達関係も良好である。定期的に本人、担任、母親、あゆみ職員で放課後面談を行い、本人の思いや努力を認め、励ましている。

事例4 はじめの一步(中3 女子 関係機関との連携支援)

- ・小学校から不登校傾向にあり、中学になり不登校となる。
- ・学校、あゆみ、こ相センが連携して家庭訪問をしているが、母親と会うことができたのも数回で、本人とは会うことができない。また、手紙をポストに入れても、折り返しの連絡はない。
- ・本年10月に、こ相センが家庭訪問で母親と本人に会うことができたが、会話は10分間ほどで、母親からは切迫感や困り感を感じ取れなかった。
- ・中3であり、卒業後の進路について話し合いたいのだが、その機会を持つことが大変難しい。

3 課題

支援目標を達成し、一度はあゆみの支援を終了したものの、再度状態が悪くなったケースが9月までに2件ある。このように、支援が必要である児童生徒の状況は一進一退を繰り返すことが多く、長期的な視野に立った丁寧な支援が必要である。

また、不登校をはじめとした児童生徒を取り巻く様々な問題は、今後、一層複雑で解決困難になっていくと考えていることから、長期的な支援・専門的な支援が行える体制の構築のために、社会福祉士などの専門職員を複数人配置する必要性が高まっている。

なお、現在、これまで職員1人で行っていた家庭訪問を2人体制に改善するべく、相談員2人を増員するための求人を行っている。